

きる。しかし、埴輪棺の被覆粘土と周辺の砂とはずれており、埴輪の素材粘土とは特に関連性はないと考えられた。

薄片観察法による胎土分析によれば、舞子浜遺跡出土の埴輪に認められた鉱物および岩石片の種類構成は、全てほぼ同様であり、埴輪棺の材料となった砂あるいは粘土の採取地は、いずれも同様の地質学的背景を有する地域内にあった可能性が高く、被覆粘土も同様の結果が得られた。埴輪の製作地については、概ね明石海峡に臨む海岸あるいはそのすぐ背後の段丘や丘陵の分布地域内が想定された。

蛍光X線分析および薄片観察法の異なった分析において、両者ともに埴輪胎土はほぼ同じであると言う結果が得られた。しかし、粘土や砂は蛍光X線分析では埴輪と数値がずれており、直接の関係が否定された。これは、分析方法の違いによる結果の違いであるが、蛍光X線分析では被熱の有無による変化が考えられるのではないかと。いずれにしても、詳細は現在未発見の埴輪製作地との照合や他の古墳との比較をして検討しなければならない。

### 第3節 舞子浜遺跡埴輪棺 (第45図・第9表)

舞子浜遺跡では、昭和35年の第1次調査から第13次調査まで19基の埴輪棺の調査が行われ<sup>(7)</sup>、第9次調査では 埴輪棺を取り囲む方形の区画が存在している。第14次調査では箱式石棺が確認された<sup>(8)</sup>。

#### 舞子浜遺跡埴輪棺墓群の範囲

舞子浜遺跡の現在までに調査された埴輪棺を見ると、西端が第5次1号棺・2号棺・第6次棺であり、現在の国道2号と神戸市道舞子高広線との交差部分にあたる。第6次調査の大部分や第4次調査やその西側の明石海峡大橋部分や第10次・第11次調査では出土していないため西限が裏付けられる。東端は第1次調査の神戸市道舞子公園福田川線の近くである。南端は第5次1号棺や第7次1号棺の国道2号のすぐ北側であり、これより南側の国道2号の改良工事の確認調査では海岸に向かって急激に傾斜しており、埴輪棺の存在する立地ではないことがわかる。北側は第9次6号棺のJR神戸線のすぐ南側である。これよりJR側は後背湿地に向かって傾斜しており、北限である。

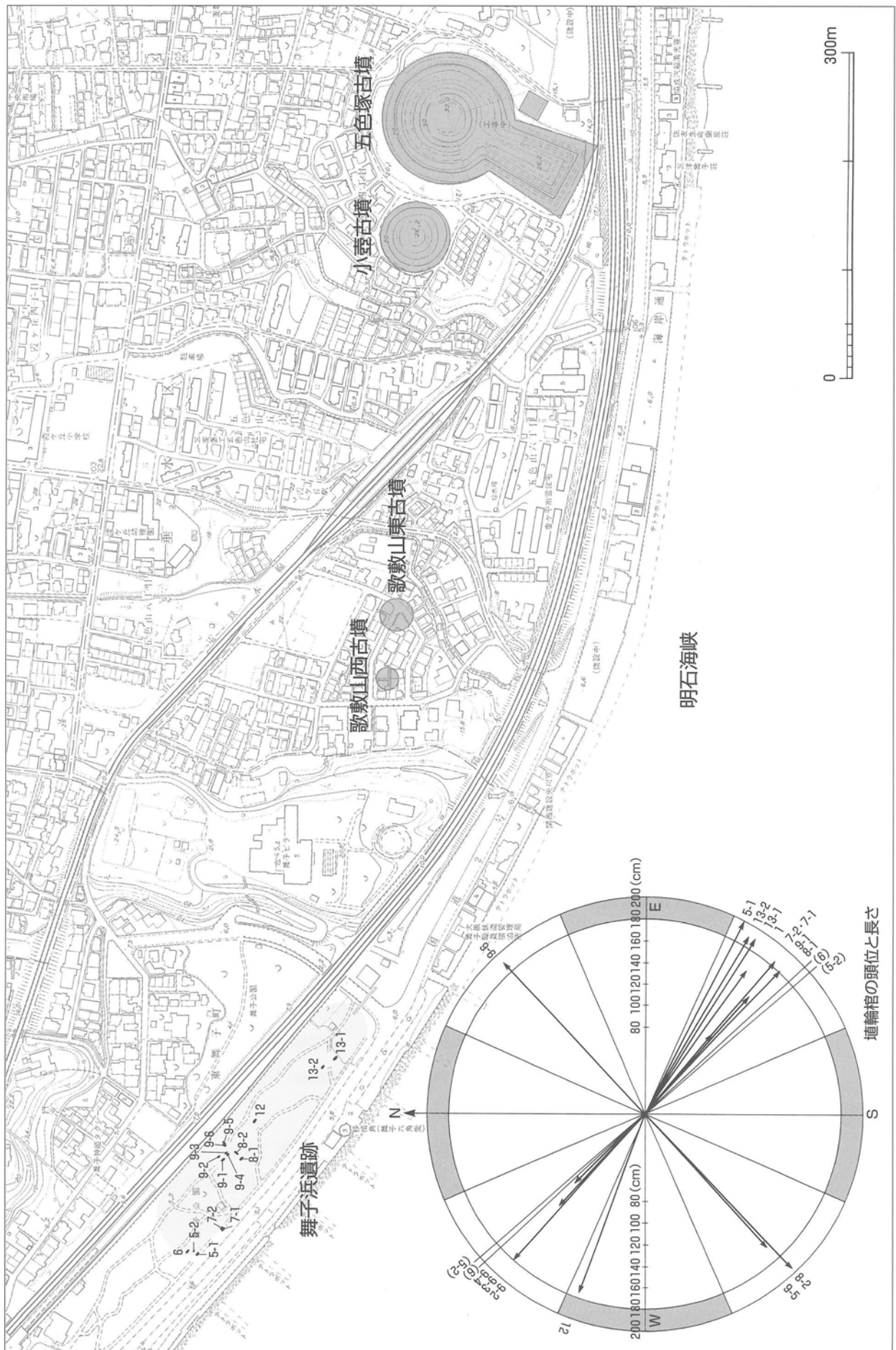
埴輪棺の底の標高値をみると、最高値は第12次棺の5.05 mであり、ついで第13次1号棺の5.00 m、や第6号棺の4.95 mがある。逆に最低値は第9次5号棺の4.05 mと1.00mの比高差がある。これらの高さの分布をみると、起伏のある砂堆であることが窺える。

したがって、海岸軸を基準に、東西約290 m、南北約50 m、面積約14,500 m<sup>2</sup>の範囲の起伏のある砂堆上に広がる埴輪棺墓群の遺跡であるといえる。

#### 埴輪棺及び頭位の方位

埴輪棺の方位は、大きくN - 50° - W前後 (N - 70° - W ~ N - 37° - W) とN - 47° - E前後の2群にまとまっている。前者は13基、後者は3基であり、前者を基準に後者は直交したものである。前者が方位の基準であると考えれば、舞子浜の海岸線もしくは砂堆の方向を基準としたものと考えられる。

頭位は人骨が遺存しているものや人骨が遺存していなくても、埴輪片や粘土を使用した枕が存在しているものもあり、復元が可能である。埴輪棺を組み合わせたときに入れ子にする場合、第8次1号棺の例外を除いて、埴輪の直径が大きい方に頭位が存在している。第8次1号棺の直径の小さい方は盾形埴輪であり、特殊なものである。また小口を閉塞する埴輪が蓋形と朝顔形の口縁の場合、蓋形の方が頭位である。単棺の場合は、埴輪の正位置の上部側に頭位は存在する。



第45図 舞子浜遺跡と五色塚古墳ほかの位置および舞子浜遺跡埴輪棺の頭位と長さ

第9表 舞子浜遺跡埴輪棺一覧

	棺名	墓壇規模	棺規模	内法	棺底レベル	単複	形態	棺身埴輪	主要小口埴輪	透孔
1	第1次埴輪棺		190	160		複	入れ子 A	普通円筒・鱗付円筒		水平・上下
2	第2次埴輪棺					複	合底		朝顔形口縁部	
3	第3次埴輪棺									
4	第5次1号埴輪棺		280	200	4.65	複	入れ子 B	鱗付円筒・鱗付朝顔形	蓋形・蓋形	上下
5	第5次2号埴輪棺									
6	第6次埴輪棺	240+×80	220	180	4.95	複	合底	鱗付朝顔形・鱗付円筒	蓋形・蓋形	水平
7	第7次1号埴輪棺	325×120	250	186	4.35	複	入れ子 A	普通円筒・盾形	蓋形・蓋形	水平・上下
8	第7次2号埴輪棺	155×55	130	95	4.75	単		朝顔形	朝顔形口縁部	斜
9	第8次1号埴輪棺	310×140	280	180	4.30	複	入れ子 B	盾形・鱗付円筒	蓋形・蓋形	上下・水平
10	第8次2号埴輪棺	280×80	235	196	4.20	複	入れ子 A	鱗付朝顔形・鱗付朝顔形	朝顔形口縁部	水平
11	第9次1号埴輪棺	285×185	187	145	4.50	複	入れ子 A	鱗付朝顔形・鱗付朝顔形	朝顔形口縁部	水平
12	第9次2号埴輪棺	245×80	215	180	4.40	複	合底 A	鱗付・鱗付	朝顔形口縁部	水平
13	第9次3号埴輪棺	210×90	170	116	4.50	単		鱗付朝顔形	楕円形・蓋形	水平
14	第9次4号埴輪棺	185×100	125	90	4.30	単		鱗付朝顔形	朝顔形口縁部・蓋形	水平
15	第9次5号埴輪棺	310×100	240	166	4.05	複	入れ子 B	普通円筒・鱗付円筒	蓋形・蓋形	水平
16	第9次6号埴輪棺	240×100	220	190	4.10	複	合底 A	翳形・翳形		
17	第12次埴輪棺	260×95	190+	178	5.05	複	入れ子 A	朝顔形・鱗付朝顔形	普通円筒	水平
18	第13次1号埴輪棺	320+×70	285	190	5.00	複	合底 A	鱗付円筒・普通円筒	蓋形・朝顔形口縁	水平
19	第13次2号埴輪棺	275+×130	250	190	4.75	複	合底 A	普通円筒・普通円筒	蓋形・朝顔形口縁	水平

以上の原則から頭位を推定すると、第12次棺は入れ子のため、西側に頭位を推定できる。また、単棺の第7次2号棺は東側に頭位を復原できる。

埴輪棺の構成

棺身は大きく2個体の埴輪を組み合わせる埴輪棺にする複棺構造のものと1個体の棺身の単棺構造のものに分けられる。前者は、組み合わせ形態により入れ子のものと合底のものがある。入れ子のものは、底部の直径の大きなものに底部の直径の小さなものをはめ込む入れ子Aと口縁部の直径の大きなものに底部の直径の小さなものをはめ込む入れ子Bとに分けられる。合底のものは直径のほぼ等しい底部を合わせた合底Aと打ち欠いた底部と合わせた合底Cとに分けられる。

棺身に使用している埴輪は鱗付朝顔形円筒埴輪が一番多く、次に鱗付円筒埴輪が多く、普通円筒埴輪、盾形埴輪、翳形埴輪、朝顔形円筒埴輪が続いている。鱗付円筒埴輪・鱗付朝顔形円筒埴輪は五色塚古墳<sup>9)</sup>で多く立てられている埴輪である。

埴輪棺の棺身の設置状況は透孔を水平にすることを原則にしている。したがって、鱗付埴輪の場合必然的に鱗が上下になるように設置される。この場合の鱗の処理は上下とも打ち欠く場合がほとんどである。例外的に第13次1号棺は下部側が打ち欠かれずに埋め込まれており、第12次棺は上部側が打ち欠かれずに残されていた。上部側は後世の影響で当時の状況を保っていないものがあり、増える可能性がある。また第1次棺と第5次1号棺は鱗を水平に設置している。

小口を閉塞している埴輪は蓋形埴輪と朝顔形円筒埴輪口縁部と普通円筒埴輪の一部がある。蓋形埴輪が一番多く用いられており、底部を棺身にはめ込んでおり、軸受部の孔は別個体で塞いでいる。蓋形埴輪は底部や軸受部の一部を打ち欠いたものが多い。朝顔形円筒埴輪口縁部が次に多い。透孔・組み合わせ部は別個体の埴輪を打ち欠いて閉塞している。

被覆粘土は棺床および全体を覆うものと、棺床および閉塞部分を覆うもの、全く覆わないものに分けられる。基盤層が砂地であるため粘土で覆ったと思われるが、丁寧な埋葬方法である。

枕は8棺で確認しており、埴輪片を使用したもの7棺、黒褐色の粘土を使用したもの1棺が存在する。

埴輪棺の規模

埴輪棺の規模は埴輪棺の閉塞部分も含めた全体と内法で測る方法があり、埴輪棺の被葬者を考えるにあたっては埴輪棺の内法が有効である。埴輪棺の内法は朝顔形円筒埴輪や翳形埴輪などの肩部や小口部分に挿入して閉塞した蓋形埴輪の底部などを除いた長さである。

被覆粘土	長軸方位	枕	頭位	推定	頭位 2	頭位 3	人骨	性別	年齢	身長	副葬品
上部	N-55° -W	無	東		入れ子大		有	男性	40位		
	東西										
	東西										
部分	N-63° -W	埴輪片	東		入れ子大		有	女性	30～50	140～150	
不明	N-37° -W	無		不明							棺外ガラス小玉3点
棺床・全体	N-43° -W	無									
棺床・全体	N-52° -W	無	東		入れ子大		有				ガラス小玉2点・鉄製刀子(棺外)
部分	N-52° -W	無	東								水晶勾玉1点・碧玉管玉2点・ガラス小玉5点
全体	N-37° -W	埴輪片	東		入れ子小	盾形	有	男性	30～60	140～150	無
無	N-46° -E	無	南		入れ子大		有	女性	20～40	140以下	無
部分	N-49° -W	粘土	東		入れ子大		一部	不明	不明	不明	無
棺床・全体	N-48° -W	埴輪片	西				一部	不明	不明	不明	無
棺床・全体	N-47° -W	埴輪片	西			埴輪上	無	無			
棺床・全体	N-45° -W	埴輪片	西			埴輪上	無				無
全体	N-47° -E	埴輪片	南		入れ子大		一部	不明	不明	不明	無
全体	N-47° -E	埴輪片	北				無				無
棺床・全体	N-70° -W	無	西				無				無
棺床・部分	N-58° -W	無	東			蓋形・鱗付円筒	有	男性	20越		無
無	N-60° -W	無	東			蓋形	有	男性	40～60		棺外鉄製鉈

複棺の内法は 145 cm～200 cm の範囲に分布しており、180 cm～190 cm に集中している。遺存人骨と比較すると 30 cm～50 cm 程度余裕をもった埋葬を行っている。複棺は規模から成人の埋葬を中心としたものである。単棺の内法は 90 cm～116 cm であり、人骨が遺存していたものはないが、棺の規模から小児を埋葬した棺であると考えられる。

#### 埴輪棺の有機的な関係

第9次3号棺と4号棺は同一の区画溝の中央部にほぼ並列して存在しており、3号棺の小口部を塞いでいた蓋形埴輪の一部と3号棺の小口部を塞いでいた蓋形埴輪とが接合した。棺の掘形から4号棺→3号棺の順で埋葬されている。以上のことから比較的短期間に埋葬されたものと考えられる。

第9次5号棺と6号棺は同一の区画溝の中に平行して存在している。被覆粘土が 1.6 m にわたって接しており、6号棺→5号棺の順で埋葬されている。

第9次2号棺の枕に使用されていた埴輪片と第8次1号棺の枕に使用されていた埴輪片が接合した。

#### 副葬品

副葬品は第5次2号棺と第7次1号棺と第7次2号棺と第13次2号棺で出土している。出土していないものが圧倒的に多い。第5次2号棺では棺外からガラス小玉3点が出土している。第7次1号棺からは棺内からガラス小玉2点が出土しており、棺外から鉄製刀子が出土している。第7次2号棺からは水晶勾玉1点、碧玉管玉2点、ガラス小玉5点が出土している。第13次2号棺からは鉄製鉈が出土している。

#### 被葬者

舞子浜遺跡の埴輪棺は前述のように、埴輪棺が全体を被覆粘土で覆われているものや、透孔や接合部などに粘土を使い目地を塞いでいるものが多く、埴輪棺内の人骨は19棺のうち10棺が遺存している。

埋葬形態はいずれも仰臥伸展葬である。

身長は身長を推定する根拠となる人骨の遺存状況があまり良くなく、判明しているものは 140 cm～150 cm あるいは 140 cm 以下と比較的低い。

死亡年齢および性別は、第1次が40歳位の男性、第5次1号棺は30歳から50歳の女性、第8次1号棺は30歳から60歳の男性、第8次2号棺は20歳から40歳の女性、第13次1号棺は20歳をこえる男性、第13次2号棺は40歳から60歳の男性であると推定された。埴輪棺の構造から単棺のものは 90 cm～116 cm と成人ではなく小児であると考えられる。

性別が判明するものは男性4棺、女性2棺、不明3棺である。

身体的特徴は第13次2号棺人骨には軽度の外耳道骨腫が観察でき、水に携わる生活習慣を持っていると考えられている。しかし神戸市教育委員会が調査を行った他の3棺には認められていない。

以上のように、埴輪棺に埋葬された者は、特定の性別・年齢に限って埴輪棺に埋葬されているものではない。

### 五色塚古墳の埴輪との比較

五色塚古墳<sup>100</sup>からは古墳に立て並べられた普通円筒埴輪が多数出土しており、復原されている。この五色塚古墳と舞子浜遺跡の埴輪を比較し位置付けを行いたい。

五色塚古墳に並べられていた埴輪は鰭付円筒埴輪と鰭付朝顔形円筒埴輪がほとんどで斉一性がある。これに対し舞子浜遺跡の埴輪は鰭付円筒埴輪と鰭付朝顔形円筒埴輪のほかに普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、盾形埴輪、楕円形埴輪、翳形埴輪など多様性に富んでおり、大きな違いが存在する。

鰭付埴輪類の鰭は底部および口縁部には付けられておらず、五色塚古墳の一点を除いて舞子浜遺跡と共通する鰭の取り付け形態である。底部は突帯間隔の2倍であり、突帯間隔の基準や直径などは類似した様相を示す。

埴輪の突帯は五色塚古墳の突帯が4条で斉一性があるが、舞子浜遺跡の埴輪は突帯が5条のものが多く、6条や4条のものもあり多様性があり、大きな違いとなっている。

透孔は舞子浜遺跡で使われているものすべてが、五色塚古墳に存在し、共通性が窺える。ヘラ記号は舞子浜遺跡では口縁部などに山形、矢羽形、縦線を囲んだもの、横片矢羽形の4種類が存在しており、五色塚古墳では山形、矢羽形、縦線の大きく3種類がいずれも複数存在しており共通性が読み取れる。

埴輪への赤彩は五色塚古墳も舞子浜遺跡も部分的に認められる。

以上のように舞子浜遺跡の埴輪は五色塚古墳との強い共通性がある反面、特殊な埴輪が存在するため、棺として用いるために専用に作られた埴輪の可能性がある。

### 被葬者の集落

古くから舞子浜遺跡周辺は開発が進んでおり、現在までに同時期である古墳時代前期後半の集落は調査が行われていない。これは五色塚古墳などでも同様であり、基盤となった集落は見い出せない。

また、舞子浜遺跡をはじめ五色塚古墳などで使用された埴輪を焼成した場所の特定もなされていない。埴輪の胎土分析では、概ね明石海峡に臨む海岸あるいはそのすぐ背後の段丘や丘陵の分布地域内で埴輪が製作されたと考えられ、今後注意が必要である。

### 舞子浜遺跡の埴輪棺群の位置づけ

同時期の明石海峡を臨む古墳として、舞子浜遺跡から五色塚古墳までの約1kmの間に舞子浜遺跡、歌敷山西古墳、歌敷山東古墳<sup>101</sup>、五色塚古墳が分布している。これは全長194mを測る3段築成の前方後円墳の五色塚古墳を盟主として、直径67mを測る2段築成の大型円墳の小壺古墳、直径約30mを測る歌敷山東古墳や直径約20mを測る歌敷山西古墳の中型円墳、舞子浜遺跡の埴輪棺群と階層的、有機的に存在していると考えられる。したがって、舞子浜遺跡の埴輪棺群は立地や埴輪の様相から五色塚古墳を盟主とする古墳群を構成するひとつであると考えられる。

註

1. 鐘方正樹「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号 2003年
2. 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・V』大阪府教育委員会 1988年
3. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
4. 小浜成「円筒埴輪の観察視点と編年方法－畿内円筒埴輪編年の提示に向けて－」『埴輪論叢』第4号 2003年
5. 神戸市教育委員会「舞子浜遺跡 第8次調査」『平成5年度 埋蔵文化財調査年報』1996年
6. 神戸市教育委員会「舞子浜遺跡 第9次調査」『平成6年度 埋蔵文化財調査年報』1997年
7. 神戸新聞社会部『祖先のあしあとⅣ』のじぎく文庫 1961年  
 第1次調査から第3次調査の詳細については、喜谷美宣氏・橋詰康至氏・上田哲也氏・河野通哉氏にご教示いただいた。  
 神戸市教育委員会「舞子浜遺跡 第5次調査」『平成5年度 埋蔵文化財調査年報』1996年  
 神戸市教育委員会「舞子浜遺跡 第7次調査」『平成5年度 埋蔵文化財調査年報』1996年  
 神戸市教育委員会「舞子浜遺跡 第8次調査」『平成5年度 埋蔵文化財調査年報』1996年  
 神戸市教育委員会「舞子浜遺跡 第9次調査」『平成6年度 埋蔵文化財調査年報』1997年  
 このほか実績報告書を参考にしたほか、神戸市教育委員会谷正俊氏・西岡誠司氏にご教示いただいた。以下、神戸市教育委員会のデータはこれに基づいている。
8. 1999年、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を行った。
9. 10. 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳環境整備事業中間報告Ⅰ』1970年  
 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳復元・整備事業概要』1975年  
 神戸市教育委員会丸山潔氏に五色塚古墳の埴輪実見の配慮と埴輪についてのご教示いただいた。
11. 梅原末治「垂水歌敷山古墳の調査」『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯 1921年

本書の参考文献

(財)兵庫県園芸公園協会『兵庫県立舞子公園百年史』2001年